様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５　年　５　月　２０　日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2010　～　2012
課題番号：２２４０２０５０
研究課題名（和文）　日米独の多文化にひらかれた大学教員と授業に関する研究：日本語教育の場合
研究課題名（英文）　Multicultural Awareness of College Teachers and Their Educational Practices: Comparative Study of Japanese Language Education in Japan, US, and Germany
研究代表者
倉地　暁美（KURACHI　AKEMI）
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：00197922

研究成果の概要（和文）：（１）文化の多様性にひらかれた態度を持つ大学教員は、いかなる生育・職場環境の下で育まれ、どのような文化観を持って授業に臨んでいるのか。エスノグラフィック・インタビュー、参与観察、質問紙調査を通して、日米独の３か国における国際比較を行い、多文化にひらかれた教員を取り巻く社会的・文化的背景や各国での日本語教師の立ち位置などを明らかにするとともに、（２）平成１９～２１年度の萌芽研究で提唱・開発した調査者の観点に配慮した質的研究の新しい研究手法の確立を目指した。

研究成果の概要（英文）：This research focuses on college teachers who are aware of multicultural issues: In what kind of environment have they been living, learning and working? What do they value in their teaching practices? By analyzing data obtained through ethnographic interviews, questionnaires, and observations in Japan, US, and Germany, this report 1) reveals social and cultural background of the teachers with multicultural awareness and how they are positioned as language teachers at their work places, and 2) further develops a new qualitative research method, which was suggested in the exploratory research in 2007-2009, that cogitate researchers' perspectives more explicitly.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,900,000	570,000	2,470,000
２０１１年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１２年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
総　計	4,300,000	1,290,000	5,590,000

研究分野：多文化間教育・心理学
科研費の分科・細目：教育学・教育社会学
キーワード：日米独、国際比較、大学教員、エスノグラフィ、質的研究の方法論、ライフヒストリー、授業観察、日本語教育、

１．研究開始当初の背景

21 世紀の到来とともに欧米で興った文化の多様性や多文化主義尊重の潮流は、日本の教育界にも多大な影響を与え、近年関連分野では多文化主義、多文化教育、多文化共生に関する教育研究が盛んになっている。筆者（研究代表者）は 20 年来、日本の大学において多文化共生時代にふさわしい人材・教員養成のあり方を探究し続けてきた（倉地 1992、1998）。しかし異文化接触の機会が最も多い日本語教育の現場でさえ、文化の多様性に対して柔軟に対応するどころか、文化を単一的、固定的に捉える教員が少なくないこと（吉野 1997）、加えて「文化の媒介者」としての役割を担わなければならない教員の文化に対する態度が、外国人学習者の文化学習に様々な影響を及ぼすことの問題性を強く認識するに至った。

そこで「自文化中心主義に基づく文化的偏見やカルチャー・ステレオタイプの危険性を認識し、文化的多様性に柔軟に対応できる力を教師は、いつ、どこで、どのように獲得するのか」、平成 13 年より 5 年間科研の助成を得て、国内の日本語教師（ボランティア教師を含む）を対象に質問紙調査、及びインタビュー調査を実施し実態把握を試みた。その結果、自文化中心主義やステレオタイプな文化観を持つことの危険性を認識し、文化の多様性に柔軟な態度を示すことのできる教師は、教員全体の約１０％程度に過ぎないことが判明した。しかもその 10%の教員のうち、高等教育や公教育が彼らの態度形成に何らかの形で寄与していると回答したものは 1 割にすぎず、日本の一般的な正規教育が、文化の多様性に対応できるような人材育成に十分寄与していないことが明らかになった。

このような日本の教育現場が、多文化教育や民族・人種問題の経験が豊富な移民の国、米国の高等教育の取り組みから学ぶべきものはあるのか否か、2003 年より米国の大学の研究者を招聘して、研究会を開催し、専門的知識の提供を受けた（倉地 2006）。その結果、米国でも多文化教育の研究成果は膨大であるが、①多文化的な感受性を有し、文化の多様性に柔軟に対応できる教員は極めて少数であり、②そうした少数の教員の文化に対する態度はいかに形成されたのかを明らかにすることの重要性を認識した。そこで、2007～2009 年の 3 か年にわたって、科研の萌芽的研究を申請し、米国で日本語を教える多文化にひらかれた大学教員を、研究業績などから抽出し、彼らを対象にインタビュー、授業観察、学生に対するアンケート調査を実施し、彼らの態度形成の背景要因のひとつとして、彼らが大学院で受けた多文化・批判教育や、人的ネットワークの存在が浮かび上がった。

当初は 2003 年の科研において日本で収集した調査データを米国のものと比較する計画であったが、全米で日本語教育に従事する教員の中から、多文化にひらかれた日本語教師を抽出・調査するのは、財政的に困難となり、在米の専門家の助言を得て、次の萌芽研究では、対象者を大学教員に限定し、著書論文、学会発表等から対象者の抽出をすることとした。これに伴い厳密な日米比較研究を行うためには、日本でも新たに、米国の調査対象者に対応するような研究対象者を抽出し直し、データ収集、分析を実施する必要が生じた。

加えて本研究では、3 カ国比較の観点の重要性に鑑みて、戦後の経済復興の労働力として外国人労働者を受け入れ、多文化社会へと移行している点で、多民族国家アメリカとは異なる多文化主義の過程を歩んでおり、多文

化主義の必要性が高等教育改革の中でも重視されているドイツを加え、日米独の比較を行い、これまでの研究を一層充実発展させる必要があると考えた。

２．研究の目的

(1) 日本およびドイツの大学で日本語教育に従事する教員で、自文化中心主義的な偏見やステレオタイプ形成の危険性を認識し、文化の多様性にひらかれた態度を持つ教員を抽出し、彼らの態度がいつ、どこでどのように形成されていったのかを解明する。
(2) 併せて多文化にひらかれた教師の文化観が、彼らの大学の授業にどのように反映しているのかを与えているのかを明らかにする。
(3) さらに、日本とドイツのデータを萌芽研究で得た米国のデータと比較し、各国の大学における日本語教師の現状や位置付け、社会的・文化的（教室・職場を含む）環境・教師としての成長を支えた教育・研究環境の異同、多文化主義の影響等について考察する。
(4) 本調査の結果に基づいて、各国における国際交流や異文化学習支援活動（日本語教育など）に携わる多文化にひらかれた人材・教員養成を行う上で有効な方法を模索し、各国の高等教育機関や教員養成の現場に対して、具体的な提言を行う。
(5) 萌芽研究で着手した質的研究の新しい手法としての「3 者間インタビュー」を開発・実施する

３．研究の方法

（1）「目的」で述べた日米独 3 カ国における大学教員とその授業に関する比較研究を実施するために、はじめに両国での文献研究や、多文化教育・異文化間教育に造詣の深い複数名の現地の大学の日本語関係者の協力を得て、日本及びドイツの大学で日本語を教える大学教員を抽出し、両国でのマイクロ・エスノグラフィック・インタビューを実施して、ライフヒストリーの聞き取りを行うとともに、許可を得て授業の参与観察及び学生へのアンケート調査を実施する。それらの調査結果に、先の萌芽研究で収集した米国のデータを加えて、3 カ国間の比較考察を行う。

（2）研究代表者は研究分担者と米国の研究協力者の協力を得て、萌芽研究で提唱した「質的研究に取り組む調査者の研究・分析の視点は。調査者のどのような背景から形成されているのかを明らかにするための「3 者間インタビュー」を開発・試行し、新たな質的研究の手法の有効性について検討を加える（図 1 参照）。

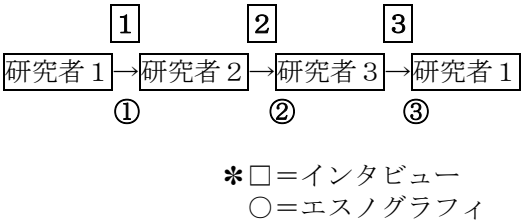

図１「3 者間インタビュー」の手順

まず初めに、研究者１は研究者２に、研究者２は研究者３に、研究者３は研究者１に、エスノグラフィック・インタビュー1～3を実施し、その結果を各々エスノグラフィ①、②、③にまとめる。

次に、研究者１は研究者２が作成したエスノグラフィ②の問題設定や分析視角が奈辺からきたものか、1のインタビュー結果に基づき分析する。研究者２は研究者３が作成した③のエスノグラフィの背景を2の結果から分析する。研究者３は、研究者が１が作成した①の背景を3の結果から分析し、3 つの分析結果を合体・提示する。

４．研究成果

（1）前の萌芽研究では質問紙調査の結果か

ら研究対象者を抽出したが、質問紙では、カルチャー・ステレオタイプに対する気づきを示していた教員のなかには、面接場面でカルチャー・ステレオタイプを表出させる者が何名か見られた。質問紙による選定には限界があることが認識されたため本研究では、研究業績や、複数のインフォーマントによる他薦により研究対象者を抽出した。しかし、それでもインタビュー、授業観察を進める中で、文化本質主義的な文化観を表出する教員が少なからずいた。インタビューと授業観察を進める中で、多文化にひらかれた教師は：

①日本語指導や留学生交流に熱心であるだけではなく、カルチャー・ステレオタイプの表出に対してセルフ・モニタリングが働くこと
②大学院で多文化主義や批判教育、文化本質主義への批判などについて学び、関連分野の研究業績があるだけではなく、多様な異文化との対話的関係性の構築に前向きであること
③権力関係に敏感なだけではなく、マイナーな立場におかれた学習者に対して共感的理解を志向すること
の３要件を満たしていること、

その３要件は、以下に示す諸要因及び諸要因の交絡によって醸成されるのではないかという仮説（倉地 2006）をここで追認する結果となった。

多文化にひらかれた教員を醸成する諸要因

（a）環境要因
家庭環境―自由、過干渉・抑圧的
社会環境―異文化体験・いじめ・マイノリティ経験 （自身、家族)、リベラルな地域環境
教育環境―特に大学院レベルでの批判教育・多文化教育、社会学、思想史、文芸批判などの洗礼、リベラルな学校（大学）
正規の授業よりも課外活動などにおける教員やピアからの隠れたカリキュラムの影響
職場環境―メンターの存在
時代背景―６０年代の学生運動の影響
(b) 個人要因―対人コミュニケーション能力、自己内省能力

（２）外国語教員の大学におけるポジショナリティに関しては、各国の学問の伝統・成り立ちや、国勢や国家間の権力関係に拠るところが大きい。今後はアジアの国における外国語教員の位置づけについて比較検討する余地が認められ、次の科研では、韓国の大学教員に対する調査を加えて、４カ国比較を実施する予定である。

今回のフィールドワークでは、米独ともに、多文化ひらかれた教員は全国に分散しているものの、核となる教員を中心に複数名の教員が集団を形成している実態が明らかになった。そこで、本研究では教員集団の中心に位置する核となる教員に焦点を当て、多文化にひらかれた教員にとって、中心的な教員の存在がどのような意味を持つのかを聞き取るとともに、核となる教員がいつ、どのようにリーダーシップを獲得したのか、ライフヒストリーの分析を行った。

他方、全国に分散し、孤立無縁な状況に置かれている教員にも、同様のモラル・サポートが得られるようなネットワークが必要であることが認められた。

今後は全国各地に散らばった多文化にひらかれた教員を結びつける国境を超えたネ

ットワーク構築を目指すべく、次の科研では、本研究の研究対象者となった米国、ドイツ、日本の教員の上に、韓国を加え４カ国の大学教員による国境を超えたネットワーク構築に関するアクション・リサーチを実施する。

（３）併せて本研究では、多文化にひらかれた海外の大学教員はどのような教室環境のなかで日本語を教えているのかを明らかにするための１つの指標として、ここでは、アメリカとドイツで日本語を学ぶ大学生が、日本に対してどのようなイメージを持っているのか質問紙調査を実施した。

両国において学習者の多くは、主としてアニメ、マンガなどサブ・カルチャーとの接触を通して、ステレオタイプな日本イメージを獲得していること、日本・日本語に強い関心を抱き、大学で日本語を履修しているとはいえ、日常的なレベルでの日本人との直接的な接触は、大都会の大学に学ぶ学生であっても乏しく、望むと望まざるとにかかわらず、教室で常に日本を表象する立場に置かれている日本語教師の役割が大きいことが明らかになった。

（４）新しい研究手法である「３者間インタビュー」に関しては、３名の研究者（研究代表者１名、共同研究者１、研究協力者１名）によって（３）の研究方法で示した通りの手順で実施した。まずは３人が、それぞれ３人の内の一名をインタビューすることとし、ライフヒストリーを聞き取り、エスノグラフィを作成した。次に、エスノグラフィの記述をした調査者をインタビューした研究者は、自ら行ったインタビューの結果に基づき、調査者が記述したエスノグラフィの分析の観点や、問題意識が奈辺から来たものか分析した。

その結果として、

① 研究に多声的な声を取り込むことによって、質的研究に取り組む調査者自身が、自分では認識することが難しい自身の思考回路や、ものの考え方、価値観がエスノグラフィのなかにどのように反映されているか認識し、自己理解を深める契機となる。
② マスター・ナラティブの脱構築を図る
③ エスノグラファーは他者や自己について語る機会は多くあっても、他者から描かれるという経験をほとんど持つ機会がない。そう言った意味で、３者間インタビューは、エスノグラファー自らがインタビュイーになることで、民族誌を書かれる調査対象者の心情や心の動きを、初めて体験的に理解することが可能となる。

などの諸点において大きな成果が認められ、エスノグラフィック・リサーチにおける、より多声的なデータ分析のあり方を示すことができた。今後は教育分野等における質的研究の発展のためにもこの手法をさらに進化・周知させていく必要がある。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

1.倉地曉美、アメリカとドイツにおける日本語教育の位置づけ：日本語教師を取り巻く職場環境、広島大学日本語教育研究、査読無し、No.22, pp. 2-9, 2013

2.倉地曉美、周縁に生きることの意味：ひとつのライフヒストリー、こころと文化、査読無し、Vol.11,No.1, pp.34-40, 2012

3,倉地曉美・南浦涼介、批判的思考をもっ

た日本語教師に学ぶ学生の日本イメージとその形成要因：アメリカにおける調査研究、広島大学日本語教育研究、査読無し、No.21, pp.31－38,2012

〔学会発表〕（計２件）

1.倉地曉美・南浦涼介、アメリカ人の対日イメージとその形成要因、異文化間教育学会、奈良、2010年６月13日

2.加藤鈴子、自由の実践としての日本語教育：ある日本語教師のライフヒストリーに学ぶ、異文化間教育学会、2013年６月８日、東京

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

倉地　曉美（KURACHI AKEMI）

広島大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：00197922

(2)研究分担者

加藤　鈴子（KATO REIKO）（H24～）

東京福祉大学・教育学部・専任講師

研究者番号：30633151

中山　あおい（NAKAYAMA AOI）

大阪教育大学・国際センター・准教授

研究者番号：00343260

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

Peter Ackermann

元ニュールンベルグ・エアランゲン大学・東洋言語文化学科・教授

熊谷由理（KUMAGAI　YURI）

スミス大学・東洋言語文化学部・准教授